

ウルドゥー長編小説の濫觴

——ナズィール・アフマドについて——

都 筑 正 夫

前回、ウルドゥー小説家ミルザー・ルスワーと彼の作品的意義について考察した。一八九九年に書かれたこの作品はウルドゥー小説の枠組みを完成させたという意味で十九世紀の掉尾を飾る記念碑的創作であった。十九世紀中葉、英文学の影響によって漸く出現を見たウルドゥー小説の約半世紀に及ぶ文学的営為の中で、この文学範疇を初めて設定準備し、そこに未曾有の実験試作を繰り広げた作家ナズィール・アフマドをここに論じてみたい。

ウルドゥー小説の一応の完成に至る十九世紀後半の文学の歩みは、一八五八年の、いわゆる「インド大反乱」におけるインド側敗北によって決定的となった英帝国主義支配とインド・ムスリムの全体的没落の過程に重なり同時に、この対極的状况を背景に発生した一連のムスリム民族覚醒・啓蒙運動を大きな支柱として進行了。N・アフマドが、デリー大

学に学び、アリーガル運動に深い係りを持ったことはその意味で象徴的である。

N・アフマドは一八三〇年U・P州ビジノール区の小村レィハルに生れた。その家系が代々ムフタイル教主、法律学者、モウルヴェィーといった僧職者を生んだ一族であったために、年少の頃より宗教色の濃い伝統的な旧教育を施された。やがて彼は高名な学者詩人で英国政府の副取税官でもあったナスルッラー・ハーンに師事、師の、イスラーム法に基いた聖俗融合の見事な実践から深い影響を受け、後の彼の生き方の規範となった。一八四五年、彼は家族と共にデリーへ移るが、再びマズジッドにおいて旧態依然の宗教教育と修養生生活を余儀なくされる。これは一族の子弟に課せられた義務でもあった。教育とは名ばかりで物乞いと下僕同然の貧しい生活の中で彼はモウルヴェィー制度の偽善と欺瞞を感じ取るが、ここでの宗教上の師アブドゥル・ハリークハリークの孫娘とのちに結婚したことは

彼の人となりを知る上で興味深い。その後ふとした事件を契機にデリー大学入学を許可されて修学と立身出世の大きな足懸りをつかむ。当時のデリー大学は英国のインド統治上教育プランになる翻訳局を拠点に西洋文化の紹介に貢献していたばかりでなく、ウルドゥー語を教育媒体とする唯一の高等教育機関としてハリー、アーザードをはじめとする幾多の民族指導者を養成していた。

学問修得後彼は教師としてパンジャブに奉職、さらに二年後の一八五六年には副視学官となってカーンプルに転ずるが、やがてインド大反乱が勃発する。デリーという東西文化・文明交流の一大中心地において知的成長を遂げた彼は、支配者英国の優位性を多方面で痛感させられていたために、インド人の反英蜂起を無謀な暴挙として否定的に扱っていたという。デリーに帰った彼は暴動の中で一イギリス女性の命を救い、その恩賞としてアツラハーバードに副視学官の地位を得る。父親の強い反対で英語を修める機会を失った彼は改めてその必要性を痛感し刻苦勉勵の末マスターする。その類稀な技能を認めた英政府はインド刑法（発布一八六一年）、証言法、所得税法翻訳の任に用いる。厳正にして明快な訳、インド語の適切な処理によって、これらは高い評価を受けた。N・アフマド全訳業中の金字塔である。その後も彼は急速度で出世を果たし、カーンプルの副徴税吏^{サブサイドル}、U・P州副徴税官

を歴任するのである。功なり名を遂げたこの時代より文学を核としたN・アフマドの創作活動が始まる。

新旧文化の劇しい衝突を一大特徴とするこの時代の変革期に係わった偉才の多くがそうであるように彼も又多方面に優れた才能を発揮した。しかし彼がペルシャ文学における恋愛詩やヨーロッパにおいてロマンと通称される長篇小説を痛烈に批判、文学芸術を排撃する立場をとったにもかかわらず、一流の文学者であったことは注目に値する。

N・アフマドが小説家としての第一歩を印したのは一八六九年の「花嫁の鑑」^{シャド・カハナ}によってである。元来この書は彼自身の娘たちのために書かれ、さらにムスリム中流家庭の女子教育にも資するよう敷衍されたもので物語形式を借りた教育論と見なすこともできる。作品のねらいは、パルダ制度の束縛によって無知蒙昧の世界に封鎖され、ひたすら隷従の道德を強制されてきた女性に、偏見や迷信の支配とそれらがもたらす不幸や受難からの脱却を促し新しい考え方、生き方を示すことであった。ここには啓蒙思想家・教育家としての意図と真面目が明らかに感じられる。

物語は二部より構成されているが相互関係は一部、二部それぞれの主人公が血を分けた姉妹であること以外にはほとんど無関係であり、それぞれ全く独立したストーリー展開をする。その一部では、性格悪しく愚鈍で技能を全く欠いた姉

アクバリーが結婚生活においていかに不幸な結末を迎えるかを描き、二部では姉とは全く対照的な妹アスガリー、知性、技能、貞淑、思慮分別その他およそ全ての望まれるべき優れた資質を兼ね備えた女性が結婚をし生活上の様々な困難を雄々しく超人的に克服していくというものである。

ストーリーは平板で羅列的で、しかも状況及び人物設定が有効なプロットとして全く機能していない。また主人公を典型とする人物像も超人が権化でもあるかのように生ける人間から遠いという欠点を見出すことができる。これは今なお空想物語文学の伝統をN・アフマド自身が背負っていたからである。しかしこれら過去の文学とは明らかに太い一線を画するのは、この作品が初めて現実の世界とそこに生ずる緊要な問題を対象として描いたことによる。この作品は英国教育局の推賞を得て多数の読者に迎えられた。

厳密な概念論争を別にすれば、N・アフマドの小説は七編にのぼり、主題の比重によって二つに大別できる。一つは「花嫁の鑑」、「ナスラーの後悔」(一八七七年)などの教育論を基調とした社会小説、他方は「時代の落し子」(一八八八年)をはじめとする政治・宗教小説である。

「花嫁の鑑」の続篇である「棺の娘たち」は一八七三年の作で、作家の教育論の発展と拡大がそこに看取される。これは自尊心が強く手に負えない貴族の令嬢フスン・アーラーを

アスガリーが教育し聡明で美しい女性に仕立てあげる物語である。正篇と同様な欠点はあるものの、主人公フスン・アーラー並びにアスガリーの義妹マフムダなどが人間性を消失することなく個性的な人物として描かれている点は見逃せない。しかも次作「ナスラーの後悔」を併せたこれら三書が「ムブタラーの物語」出来までに読者の圧倒的支持を得て五万部を売るベストセラーになったという事実は、作者の創作意図が十二分に達成されたことを示すばかりでなく、文学とりわけ小説というものの成り立ち、あるいは小説の社会性を明瞭に示唆するものであった。作家の中の啓蒙思想家、教育家とその目的至上主義は人物の類型化、ストーリーの単調、予定調和的結末、作家の物語への介入など小説特有の興趣とは背反するいくつかの致命的な要素を小説の中に持ち込んでしまっている。

この点は「ナスラーの後悔」においても倦むことがない。前二作にも見られるようにここでも人物の饒舌な会話(というより演説や説教)は人物を素通りした「僧職者」N・アフマドの論理が捏造したものであるかのような印象を与える。これも教育論の延長線上にあるもので、今まで誤解されてきた子弟教育の義務について語ることを主眼としている。子弟教育とは「単に子供を育て、日々の糧を得るための技能を植えつけ、結婚させれば終りというのではなく、子弟を倫理的に教

化し、その性格を改善し、習慣を正し、信仰・思想を正しくさせること」であると説く。

コレラに罹った主人公ナスーは病の床で死に直面し夢の中で神の暗示を受ける。過去の不篤実な生活を悔い改め、神の教えに従って自己変革と家庭改革に取り組む。三男三女のうち長男を除く五人は緩急の差こそあったが父の忠告、説諭を受け入れて正道に入る。しかしひとりカリームだけは死の直前まで父に抗い続ける。家出し逮捕され戦場で負傷するといった度重なる不幸は不信仰の報いなのである。

この作品ではプロットにおいて進歩の跡がうかがわれる。導入部と結末における生と死の重層的な扱いはこれを証明する。人物の個性化は特にカリームにおいて巧みであり、会話に盛り込まれた心理描写はそれを助けている。しかし又、アクバリ・アスガリーにおけるが如く兄弟たちの結びつきや交流、接触が極めて薄いため内的緊密性に乏しいことは指摘されねばなるまい。

最後に「ムブタラーの物語」（一八八五年）と「時代の落し子」（一八八八年）に触れてみよう。前者は「人生と文学の各々の意義と相互の結びつきを感じしめる指標をもち……小説技法のあらゆる兆しを導こうとする最初の小説」と言われる作家最良の社会派小説である。後者は自伝的要素を多分に盛りこみながらアリーガル運動の本質を問い直し民族の進むべ

き将来について強い反省を加えようとした戯画と隠喩の政治小説である。

「ムブタラーの物語」では二重結婚が扱われている。重婚の罪悪とその悲劇を元をたどればやはり教育の欠陥に起因すると作者は説く。しかしこの作品には作家の化身はほとんど姿を見せず登場人物の多くは一人歩きのできる個性を備えている。作家はここで初めて主人公の一生を描き物語に一貫性をもたせることに成功した。会話は登場人物の心の動静を適切に反映するものとして意識的に用いられているし、二人の妻の対比や継起的事件の多用など小説技法の斬新な駆使が見られる。ここではその他三篇の作品に触れることはできないが、N・アフマドが後の作家たちに与えた影響について若干の私見を述べて終りとしたい。

ヒンドゥーのウルドゥー作家に比してムスリムの偶像破壊的精神構造は小説の人物造型に適さなかったと言われるが、N・アフマドは幾多の特徴的な典型人物を創造してサルシャールやプレームチャンドを先導したばかりでなく、農村や都市を写実的手法で描き、宗教・政治・教育その他多岐にわたる諸問題を真贋に取り上げた功績は計り知れない。初期三部作はムスリム近代教育のバイブル的存在と言いうこともできよう。N・アフマドは「学者の太陽」^{シャアスル・ウァラー}の称号を得て一九一二年デリーに没した。

（東京外国語大学大学院修了）